

飛耳長目

通巻169号 平成29年12月1日発行

「修身教授録」探求(第三百三十三回)

一 加藤理学博士について

森信三

物乏しきこのごろ少し寂しくなり

万葉集を読みあたりけり

赤彦

この歌は歌としては、それほど良いというわけでもないでしょうが、赤彦の生活の一面が伺われるという点で、割り合によく人々に知られていようであります。赤彦が万葉のもつあの雄渾壮大なしらべを現代に再現しようとした事は、あなた方もど存じの通りです。ここで「物乏し」といつているのは端的に申せば「お金が足りなくなつて……」というくらいの気持ちでしょう。

お互人間はどうもお金が潤沢だといふ心が弛みがちになり、これに反してお金が足りなくなると、自然と心も引きしまるものようです。そこで赤彦も近頃お金が乏しくなつたので、どうも家に引きこもつて万葉集に沈潜しているといつのでしよう。

■期待以上のすばらしい講話

昨日皆さんと共に聞きしました加藤理学博士のお話は、わたくしが過去幾年

間聞いた話の中でも、もつとも深い感銘を与えられたお話でした。初めは偉人祭の行事として、和宮様のお祭り並びにそれに関する講話の後で、女の理学博士のお話があると聞いた時には、わたくしは何か一種のそぐわなさの感を抱いていたのであります。ところがやがてその方は家庭をお持ちになり、さらにお子さんを二人も育てていられる方だとお聞きして、いささか感じが変つて参つたのであります。そして多少積極的にお話を聞きたいという興味を持ち出したのでした。さていよいよ講堂において、当の加藤博士があの和服姿で、黒の三つ紋の羽織を召されたお姿をお見受けした際わたくしは、実に意外な感じを受けると共にお話を待ちもようけるわたくしの気持ちは、一度にたかぶつた次第でした。おそらくあなた方も同様な感じだったかと思いますが、あのご様子の中には、あの方が女の理学博士であり、いわんやあの日も午前中は京都大学の理学部で、専門の学徒を相手に学問上の講義をなさつた方という匂いは、まったく露はども感じられませんでした。

ネットで 森信三先生と修身教授録 と検索

■深くて広い心情の世界を

さていよいよお話に入ってから、わたくしには意外な事柄が多かったのです。まず最初に詩の暗誦をなさったことは、多分あなた方としても驚かれたことと思います。女性の身でありながら、現在わが国の理学界で一家を為していられる方が、その少女時代には詩にあこがれた一人の純情な乙女だったということは、わたくしには色々なことを暗示させられたのであります。もちろんそれは、二十数年も前に読まれた詩を、あのようにならぬと暗誦できる記憶力の強さもさることながら、同時にわたくしとしては、人間の教養の基礎には、深くて広い心情の世界がなければならぬということを、今さらのように感ぜしめられたのであります。しかもそれが、あのさい詩の暗誦によつて、ご自分の記憶力を示そうなどというお気もちは微塵もなく、ただあなた方の乙女姿をご覧になつて、自らのありし日の姿を思い出されて、自ら溢れ出たものであることを思う時、わたくしのこの感じはひとしお深いものがあつただけです。

■秘めたる精神

次に感じたことは、女子師範時代に凶画に熱中されたというお話でした。ご白身にも「わたくしほ凝り性ですから」と申していられましたが、この凝り性というところが、また一つの大事な問題であります。すべて偉大な仕事を成し遂げた人、あるいはそうまで申さずとも、すべていつかどの人物といわれるほどの人は、男女を問わず、どこか凝り性ともいうべき処があるようであります。実際そうではなくては、あそこまでは行けないのであります。即ち凝り性の人とは、ある一つの事に自己を打込むことの出来る人というのであります。師範学校時代に生徒たちから、「九点先生」という仇名までつけられて、誰ひとり十点をもらった者がない先生から、どうぞして十点貰おうとされて、四年間という長い間、絵を描きに描かれたという強敵な意志力は、やがて後には家庭の重荷を背負いながら、生涯をつらぬいて、ご自身の研究を続けられた意志力となつたのでありましょう。しかもそれはどまめに努力されながら、その教師からは最後までついに十点は貰えなかつたにも拘わらず、それをつゆ恨

みともせず、また途中で投げ出すようなこともなさらず、否、それによつて得られたものが、後年いかに自分を益したかを感謝していただけるお姿こそ、実にお見事な態度だと思つたのです。が同時にまたああしたお心掛けでなければ、真に偉大な仕事というものは、出来ないものでありましょう。後で校長室でのお話に「わたくしは位置も名誉も望みません。ただ自分の努力が少しでも人類の幸福になるなら、それで満足です」と申していられましたが、つまり絵において点数を恵まれないでも、何ら恨みとせず、途中でこれを止められなかつた意志力は、やがて報いを求めない心となつて、ご専門の研究の道に生涯を貫こうとするようになられたのでしよう。同時にかつての日の凶画への異常なご努力も、師範在学中にはついに報いられなかつたけれど、やがて女高師に入られてから報いられたように、あの方の生涯をつらぬいたご努力は、よし、ご存命中には十分に報いられないとしても、おそらくは没後において報いられることでありましょう。現に今朝もお聞きするところによりますと、あの方のお書きになつた文章が、近く国定教科書

に載るといふことであります。かくしてあの方のお偉さは、ご自身の現在の境遇に何ら不平の念をお持ちになられず、しかも自分の志すところへ向って、あくまでも打ち込んで行かれる、その比類なきご努力にあると申せましょう。師範卒業後早々のうら若い女の身として、自ら進んで村の夜学を受け持たれて、青年たちに必要な珠算を教えられた異常な努力は、やがて方向を転じて女高師から帝大を出て、ついにわが国で三人の女理学博士の一人になられながら、なおかつ留まるどころなく研究の歩みを進める力となつていたのでしよう。

■背後は「母」の支え

な お今一つ注意すべきことは、あの方を今日あらしめた背後の力として、そこには偉大なお母さんがいられるということとであります。一家の破産によって女学校の三年から、あの方を女子師範に入れたられたお母あさんは、自分もこれからひと勉強すると言われて、東京へ出て、ミシンの学校へ入られたということでありませう。さらにまたあの方が田舎の農村に骨を埋めようと決心していられたのを、

ゼヒにといつて女高師へ行くことを奨められたのも、みなお母さんの力だということとあります。また今日二人のお子さんまでありながら、女中を使わずに過ごしていられることなども、ひとえにこのお母さんの、献身的なご努力から来ていると申してよいでしょう。日曜などには、あの方ご自身も洗濯までなさるとのお話でしたが、しかし体の丈夫な点では、とうてい母に及びませんと申していられました。こう考えて参りますと、あの方を産み、あの方をして今日あらしめた背後には、あの方に劣らぬお偉いお母さんが控えていられることを知らねばなりません。この事もまたわたくしどもにとつては、大なる教訓であります。とにかくに昨日のお話は、味わえば味わうほど意味ふかいお話でありまして、おそらく今後とても、ああいう種類のお話を婦人の方からお聞きすることは、二度とあるまいかとさえ思われます。

さてあなた方の前には、将来主婦としてまた教師として、という「一人二役」の大役が横たわっているわけですがあのような方が、現在この日本の一隅にいられるということは、あなた方も努力しただ

いでは、自分の前途に横たわるこの大役を、豊に仕果たすことが必ずしも不可能でないことを、如実に教えられたわけでもあります。またわたくし自身としまして、わたくしの今後の歩みの上に、じつに容易ならざる教訓を与えられたわけでありませう、しかしそれが如何なる事であるかは、今日ここで申すべき事ではありませんのでさし控えます。しかしとにかくわたくし自身にも、大なる教訓を得たわけでありませう。希^{こいねが}わくばあなた方も、わずか三十分のお話ではありましたが、あの中から「女として及び女教師として」というこの二つの道を、将来いかに調和させてゆくべきか、という難問に対して、一つの鍵を見出して頂けたらと思うしだいです。その意味では、あれほど大きな教訓を含んだお話というのも、その場での感激は非常に強くても、しばらく日がたつとたく、消え去りやすいものですから、以上甚だ不十分ではありますがありますが、わたくし自身が心に受け止めたところの一端を申し述べて、後日あなた方の回想の一端にも思つたしだいです。

(五百木美須麻流記)

(修身教授録第四卷昭和15年5月発行同志同行社)

再軍備 (微言)

森信三

○終戦後満五年を経過した今日、初めて講和会議が開催された。これは世界史上でも類例の少い事例であろう。

○わが国の武装解除が行われたのは、今から六年前のことに過ぎない。然るに今やそのわが国に対して、軍隊を置けとの動きが盛んである。

○わが国の武装解除を逆転せしめようとする動きは、まさに世界文化史の「逆転」と呼ぶべきものであろう。

○わが国は今日なお積極的にはみずからの希望や意志を述べうる段階には達していない。がそれにも拘らず、或る程度にわが国の「意向」が問題とせられるようになってきたのである。

○「現実のバランス」というか、「勢力の均衡」というか、とにかくこの現実界では、自ずから力の平均化が遂げられるところに大自然の妙用がある。

○文字通り虚手空拳のわが国を相手にほとんど全世界の国々が和を講ぜんとする。物が真空の一点に向かって集まるようなものである。

○講和後われらは如何なる歩みを為すべ

きであるか、これ自明の如くでありつつ至難の問題といふべきであろう。

○わが国は軍備を捨てた国である。軍備を捨てるということは、戦争の本格的否定ということである。わが国のみが戦争否足の一線に立った国である。

○然るに一旦世界に向って軍備の放棄を宣言しつつ、再び再軍備の気配がみられるということは、世界史上かつてなき面妖なることといわねばならぬ。

○何故軍備は放棄せられたのか。その根本理念に立って考えれば、不徹底なる子供だましの再軍備の不可なることは改めていうまでもない。

○かくしてわが国における、またわが国に対する、再軍備論の台頭は、まさしく人類文化の现阶段の矛盾を露呈するものという外ないであろう。

(「開頭」昭和26年9月号通巻51号)

あとがきに替えて

奇しくも現今、憲法改正論議、とりわけ九条の改正に関わって議論が沸騰しかけている。再軍備の問題で時の政府と国民を悩ませた時期とある意味で、不思議な巡り合わせとも言えようか。

「根本理念に立って考えれば、不徹底なる子供だ

ましの再軍備の不可なることは改めていうまでもない。」との森信三先生の当時の感懐は、大きく外れて、現今日本は世界有数の軍隊を持つ国家と なっていることを知らねば始まらない。

日本人は敗戦後の70余年前からあまり成長して ないか、あるいは思考力が停止ないし退化してい て国民が平和ぼけで、不戦の誓いをしていれば未 来永劫平和が保てると信じて疑わない輩が大勢い るのはいかがなものか。世界は常在戦場であって いつでもどこで命を落とすことになるか分かったも のではないことを深思すべきであろう。憲法に平和 条項があることで世界が日本に平和を担保してく れる訳がなからう。また近隣諸国の歴史認識のズ レないし某国など国家ぐるみの歴史改ざんを注視 し、日本も負けずに真実を世界に発信する努力を 官民あげてすべきかと……。国民すべてが関心を もって事の推移を監視し学習に精を出し、どこで も誰でも正しい認識を発する常識を堅持すべきで ある。

(29日二纂)

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話0744-4513422
Email: hji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn